

生涯学習部会 II

横 澤 厚 彦

(日本生涯教育学会北海道支部)

生涯学習部会IIでは、次の4主題について8人の発表があった。

- (1) 佐藤晴雄氏(東京都大田区教育委員会・拓殖大学講師)による「生涯教育における障害者教育の構造」
- (2) 伴 恒信氏(鳴門教育大学) 望月好春氏(鳴門教育大学大学院)による「企業従業員の生涯学習行動と意識についての調査研究」
- (3) 添田晴雄氏(大阪市立大学大学院) 山本克典氏(姫路学院女子短期大学)による「生涯教育における発達課題の再考についてー「高齢者生きがいインタビュー」を通してー
- (4) 佐々木 實氏, 高玉敬輝氏, 渋谷健治氏(国立花山少年自然の家)による「青少年施設(集団宿泊施設)の生涯教育に果たす意義と役割ー調査からみる子どもの意識と態度の変容ー」

司会は横澤と古野有隣氏(金沢市立美術工芸大学)の二人が担当した。以下、司会の一人として、この四つの発表について、その内容の概略をまとめ、若干のコメントを行うこととする。

さて、臨教審が答申の中で「生涯教育」という用語を使わずに「生涯学習」のみを用いようという明確な意図を示し、その答申に沿って行われた

文部省の組織改正によって生涯学習局が発足したのは周知の事である。

これは、国民の一人ひとりが、それぞれの自発的意思に基づいて、適切な手段を選択しつつ学習をするという学習者の立場を強調する考え方が、臨教審の答申の背景にあったと思われる。

しかし、今日、果たして生涯学習活動は地域住民の中に定着したであろうか、あるいは、その振興のために行政の対応は適切にすすめられているであろうか。こうした事について、この四つの発表は、それぞれ「生涯学習」の定着、振興と言う面で極めて示唆にとんだ問題の提起をしているように思われる。

先ず佐藤晴雄氏の「生涯教育における障害者教育の構造」と言う発表で、氏は冒頭「生涯教育」は学校教育の再編とともに、「中等以後の教育を万人に保障しようとする点にこそ、その最も大きな意義をもっているように思われるが、果して万人を対象とした施策が、現に、どこまで推進されているであろう、又、そうした事が、実際に可能なものであろうか」という疑問を投げかけている。

特に、氏の発表の中で強く主張しているのは、こうした生涯教育の基本的な考え方と、「障害者」に対する対応という点で現状を見ると、極めて多くの問題があると指摘している。つまり、こうした問題の背景には、障害者は一般的に、社会的に不利益な立場にある事が多く、教育でも例外ではないと考えられる。それは、障害者は「教育よりも福祉の対象だ」という考え方があるからであろうと論じている。

氏は、今後、障害者を対象とした教育、とりわけ社会教育の場で「障害者の学習権」の保障という観点から、次の問題を提起している。即ち、

- (1) 教育の機会均等を図る上で、障害者が現実増加しているという状況を無視してはならない。(2) 現実には、障害者の享有する学習権が無視ないしは軽視されやすい。
- (3) 障害者に固有な学習課題や教育方法が存在する。したがって障害者の生涯教育施策に関し、具体的な手立てが示される必要がある。

としている。生涯教育における「障害者教育」の位置づけが不明確なのは、これまでの社会教育の中では、障害者の教育が十分着目されていなかったからである。それは、財政的・人的要因、福祉行政への依存傾向、障害者教育に対する認識の弱さ、障害者の教育需要の潜在化といった事が原因であろうと指摘している。こうした問題があるとすれば、

- (1) 障害者が享有する学習権の内在的価値意識の確立
- (2) 「統合」と「分離」の葛藤の克服
- (3) 生涯教育を時系列的及び領域的側面で見るとのみならず「社会的弱者」という立場からとらえる。

といった事が、今後の課題であると述べている。

次の発表は伴恒信氏と望月好春氏による「企業従業員の生涯学習行動と意識についての調査研究」である。

この発表で冒頭触れた事は、これまでの生涯学習を推進するための基礎資料を得る目的での調査は、国も都道府県も市町村も行っているが大同小異であった。したがってこの調査では、新堀通也氏の提唱する「生涯学習課題の枠組みを分析枠に据え」将来、生涯学習固有の理論を設定していく上での試金石にするのが一つのねらいである。二つ目のねらいは、住民の潜在的学習要求を刺激し、掘り起こす事によって、人々の潜在意識に一步でも迫っていききたい。三つ目は、将来、行政施策として策定可能な具体的アイデアを質問紙の中に盛り込み、住民の意識を一定の方向で喚起する事によって、施策の促進を図るといった「政策科学的未来指向型」の調査を試みたと述べている。さて、新堀氏は、生涯学習の課題として、「学習課題」と「必要課題」に触れているが、この調査では、社会のライフに由来する「必要課題」と、質問紙調査を通してどこまで把握できるかが問題であると述べている。文献研究の結果、NHK放送文化研究調査所が「外からの刺激や手がかりを与えて意識化されるもの」という、いわゆる「必要課題」把握の方法として作った376の学習項目のリストから学習者が選択する方法を否定し、むしろ、広範囲な領域をカバーしつつも、ある程度の具体

的を促ち、煩雑な印象を与えないくらいのリストを作成して実施したと、その経緯に触れ、調査の結果について発表しているのである。

次の発表は添田晴雄氏と山本克典氏による「生涯教育における発達課題の再考について—高齢者『生きがいインタビュー』を通して—」である。この発表では、冒頭生涯教育学会年報8号に掲載された国立社会教育研修所の井上講四氏の論文を紹介し、学習プログラム作成の基盤として、人々の「要求課題」と「必要課題」の把握が大切である事に触れ、「必要課題」は、その内容として、人間の成長に必要な発達課題と地域課題に分けられると述べている。

しかし、この中で従来の「発達課題」には問題が多く、再考する余地が残されていると問題を提起している。

特に、高齢者と言うのは「衰退期」であると言われているところと大きな問題があると指摘している。さて、地方公共団体で学習計画を作成していく上で設定している発達課題は、そのほとんどがハヴィガーストの発達課題を参考にしているが、アメリカの生活と文化を基盤にしてつくられた、この発達課題は、現在の日本における文化と違っており、年齢区分の仕方にも問題があると指摘している。しかし、実際に市町村における課題の整理は多分にハヴィガースト的であるのが実情であると見ているのである。

発表では、さらに再度「高齢期」が「衰退期」であるという従来の考え方は誤りではないかと述べ、神戸市が「高齢者長寿社会研究機構」を設け、研究やいろいろな実践交流を通じて、その結果をまとめていると、各種インタビューの例を挙げている。その結果、

- (1) 学習の実質スタートは何歳からでも遅くない
- (2) 定年後に何かをしたいという目標は、壮年期に立てている
- (3) 自分の達成したいもの、完成したいものに満足したり、そのレベルに固執したりせず、よりよいレベルを目指している

ということが、インタビューの結論として言う事ができると述べている。

次の発表は、国立花山少年自然の家の「青少年施設の生涯学習に果たす意義と役割」についてである。冒頭、青少年施設設置の背景として、昭和30年代以後の急激な社会構造の変化が、青少年の健全育成の障害となり、非行化の傾向に拍車をかける結果になったと指摘している。特に、自然から青少年が隔離されてしまった今日状況の中では、意図的に教育的配慮による青少年と自然の触れ合いの重要性を挙げ、その一つの対策として推進された青年の家、少年自然の家は、ユニークな施設として青少年の関心と人気を高めるようになったと述べている。この団体宿泊訓練で、施設側がねらっていることは

- (1) 自然の思恵に触れ、自然に親しむ心や、自然に対する敬けんの念を培うこと
- (2) 規律、協同、友愛及び奉仕の精神をかん養すること
- (3) 自然の中で、心身を鍛練し、自ら実践し、創造する態度を育てることをあげ、大きく青少年の健全育成に寄与することが使命であると述べている。

又、戦後5回目の学習指導要領の中でも、集団宿泊的訓練や奉仕活動が、特別活動の中で、正式にウエイトをもって位置づけられるようになった事を挙げ、これら施設の学校利用が一層促進されるであろうと強調している。

又、少年や引卒指導者に対するアンケートの結果を見ても、集団的宿泊訓練の成果が予想以上に高く、青少年の関心も極めて高いと評価している。

さらに、具体的成果をあげるために

- (1) 集団宿泊生活のもたらす成果
- (2) 生活体験のもたらす成果
- (3) 自然体験のもたらす成果

が相乗的効果を高め、青少年の健全育成に大きな役割を果たすばかりか、生涯学習に対応する基本的生活態度が形成されるであろうと述べている。

最後に、この発表では、利用団体への提言、設置者への提言、施設職員への提言によって、青少年教育施設の飛躍的成果の拡大を目指すべきであ

ると結んでいる。

〈まとめ〉

従来の社会教育，あるいは生涯教育の分野で使われていた「学習要求」や「学習必要」についての研究が大勢であった。今後の生涯教育を広げていく上で，従来の一般的流れと異なる研究の発表が必要であるが，今までの考え方に批判的研究があったのは，この部会の特色であったと思う。

特に，障害者についての研究発表は，従来なかった発表だけに特色のあるものであり，生涯学習が，障害者とのかかわりで論じられたのは，生涯学習の基本的なねらいの一つであったと考えられる。